

はじめに

翻訳ツールの目覚ましい進歩によって、“正しい”英文を書くこと自体は、格段に容易になってきた。しかしながら、論文を組み立てるには、どのようなフレーズを用いて、どのような構成に、あるいはどのような流れにするのかを理解する必要がある。大切なことは、論文の書き方は、その分野のトップジャーナルに学ぶということである。トップジャーナルに採択された論文は、厳しい審査を経ていただけあって、データだけでなく論理構成や英語表現においても優れたものが多い。

本書の目的は、論文の文章を組み立てる際に必要な情報を、できるだけ具体的に提供することである。なかには英語力があれば、いくらでも論文は書けると思う人もいるかもしれないが、たとえ英語のネイティブであっても「型」を理解していなければ簡単に書けるものではない。さらに言えば、論文の型は、1つや2つの手本をみただけで理解できるほど単純でもない。一方で、論文には分野ごとにさまざまな決まった型があるので、たくさんの論文を分析すれば、その傾向を掴むことができる。そのような型さえ学べば、論文執筆自体には、それほど高度な英語力を必ずしも必要とするものではない。

そこで本書では、生命科学分野のトップジャーナル30誌300論文の分析を行った。原著『トップジャーナル395編の「型」で書く医学英語論文（羊土社）』では、臨床医学論文の構造とそれを論文執筆に役立てる方法を示した。一方、生命科学（基礎医学）分野の論文の書き方は、臨床医学分野の論文とは明らかに異なっており、今回はその書き方をまとめる。生命科学分野の論文を対象として、Introduction, Materials & Methods, Result, Discussionの4つのセクションをおのおの3つ、合計12のパート（Move）に分けて分析を行った。具体的には、300編の論文（総語数約150万語）を、それぞれ12のMoveに分割したコーパス（データベース）を作成し、それらを相互に比較して定量的に分析した。他のMoveに比べて、おのおのMoveでよく使われる統計的に有意なキーワードを抽出し、それを中心とするMoveに典型的な定型表現をまとめたものが、本書の主な内容である。本書で解説する内容は、実際の論文を分析した結果に基づいており、客観的できわめて信頼性の高いものである。まとめるにあたっては、**Move**の低位概念として、**Step**と**定型表現**を設定してわかりやすく整理した。論文の流れに沿った定型表現を示していることが本シリーズの特徴であるが、本書では、英語表現だけでなく、

明確なストーリー展開のつくり方を学ぶことができるであろう。

本書はPart 1～3の3部構成である。Part 1では、まず、Move 分析結果の概要として、セクションごとにMoveの流れを典型的な英語表現を使って説明してある。論文におけるMoveの位置付け、何を意味するかを理解できるであろう。また、紹介する**Move**キーワードやキープフレーズは、論文で使う代表的な英語表現である。特にキープフレーズは、各MoveとStepの特徴を端的に示しており、これを眺めることによって各Moveの概要を代表的な英語表現と結びつけて理解できる。

Part 2では、本書の中心となる英語定型表現を記載している。手っ取り早く英語表現をみつきたいときは、ここを探すとよい。**Move → Step → 定型表現**の3段階の分類があるので、場面に則した英語表現を容易にみつけることができるであろう。また、MoveとStepは、単なる分類ではない。ここでは、論文の流れも合わせて理解するように努めよう。

Part 3では、各セクションにおけるストーリー展開のポイントを、各Moveの冒頭文と最終文の分析から明らかにする。Move分析によって得られる情報は、キーワードやキープフレーズの頻度に過ぎないが、それを使ってどのように論文の内容を組み立てていくのか、キーワードやキープフレーズを使って、実際にどのように論文の組み立てていくのか、Part 3では、そのための各Moveの構成上のポイントが示してある。単なる表現集として活用するだけでなく、さらにスキルアップするための方法をじっくり理解していただきたい。

本書は、全体像がみえにくい特定の場面別の表現集ではない。Introductionからはじまる論文の流れに沿って、12のMoveそれぞれに典型的な表現が集めてある。そこで、まずは自分が書こうとするセクションに対応する本書の部分を参照しながら、論文の構想を練り、必要な定型表現を探すとよいであろう。もちろん、同じ表現が複数のセクションで使われるということはよくあることであるが、本書では、その裏にある流れや意識の違いなどがわかるようにまとめているので十分に活用していただきたい。

2022年2月

河本 健
石井達也